

## 公認心理師

### 阿曾 加寿子さん



#### —公認心理師とは、どんな職業ですか？—

心の問題で支援の必要な方の相談や援助とともに、その方の関係者に対する相談、心の健康に対する教育や情報提供を仕事内容としています。

以前は「臨床心理士」という資格だったのですが、2018 年に国家資格になり「公認心理師」に変わりました。臨床心理士や認定心理士は民間資格で、公認心理師は国家資格です。

#### —心理学の道に進んだきっかけを教えてください—

子供から大人に変わっていくときに自分は他の人と違うなと思い、自分を知るために心理学を学びに大学に行きました。「心の中ってどうなっているの？」ということが知りたかったのですが、答えをくれたかという、そうでもなかったです(笑) 理論は学ぶけれど私のことが本に書いてあるわけでもないですし、私が持っている「特別さ加減」はそのころ医学的にはまだあんまりわからなかったのです。

でもユング派の分析心理学からはたくさん重要なことを教えてもらいました。「トリックスター」という概念は、既成概念にとらわれず枠にはまらない考え方を、時代を切り開いて変えていくような役どころです。自分は大したことはできないけれど、既成概念にとらわれない、ちょっと変わったところのある自分だからこそ、お役に立てるところもあるのではと思えるようになりました。

#### —心理師としての仕事の始まりはhowでしたか？—

最初は札幌医科大学の小児科と小樽第二病院の精神科で臨床を始めました。駆け出しの頃から刑法犯の精神鑑定のお手伝いをさせてもらったり、そのあとで勤務した北大精神科神経科では精神科デイケアの経験をさせてもらいました。精神科リハビリに情熱を持っている先生がいらして、診察室以外で会ったり、町に行ったり、泊りに行くという機会を与えてもらいました。ひとつひとつ重ねていくうちに、たくさんの患者さんから方向性を教えていただいたように思います。

#### —心理師として印象深かったことはありますか？—

患者さんとの出会いの中でも特に印象に残っていることがいくつかあります。駆け出しの頃ですが、ある 10 代の心理検査をすると統合失調症の発症が疑われる結果でした。つまりその方はこれからの人生をこの病気と共に生きていかれるという始まりに立ち会ったということです。とても厳粛な気持ちになりました。

#### —当院で働くきっかけを教えてください—

四十坊院長と私は札幌徳洲会病院に勤務していて、先生がこの病院に勤務されるようになって前野先生に私を紹介してくださいました。ホスピスを立ち上げられて 2 年目くらいの時です。

総回診での細やかな心遣いを拝見し「ここで働かないでどこで働くのだ？」と思ったのです。他のどんな病院よりも患者さん一人一人の心を大切に、家族のことを大事にしている、そう感じました。それで他の仕事を整理してこちらでも仕事を

させていただくようになりました。

当時はホスピスの黎明期だったと思うのですが、当時の師長が心理職の仕事をよく理解されていて、どこに心理職の必要性があるかということを知って役立ててくれました。最初からチームの一員として扱ってくださいました。

だからとても仕事がしやすく、キラキラした有意義な時間を過ごすことができました。

#### —日々、心がけていることはありますか？—

最初に患者さんと接するときはニュートラルな気持ちで接しています。どう関わるかは特に決めず、ご本人のお話を聴き、これまでの記録などあらゆる情報を集め、その後の対応を考えていきます。公認心理師の役割は、ある意味「スキマ産業」です。カウンセラー的関わりが必要なならカウンセラーに、隣人的な関わりが必要ななら職業はとっぱらって、隣人として接する。そばにいるのがいい方には「そばにいる人」になる。歌が好きなら一緒に歌います。

カンファレンスもビビッドでわくわくするような話し合いでした。一人の患者さんについて、内科や外科の情報の上に、その方のこれまでの時間の流れが加わり「この患者さんのために何ができるか」「もうちょっと楽にしてあげるにはどうしたらいいか」とみんなで知恵を出して、ケアを作り出したり。それを見ているだけで嬉しくなってホスピスの仕事を今も続けています。

#### —どのようなことをしているか詳しく教えてください—

公認心理師の役割はまず精神科疾患の有無とその様相についてのアセスメントを行なうこと。ホスピスに心理師がいるところはまだまだ少ないです。お一人お一人の深い喪失感や後悔についてもお話を伺いたいのですが、実はあまりお話を聴けていません。非常勤で、時間が限られておりやみくもには関わられません。どの方にも濃厚な関わりは難しい。ただどなたについてもアセスメントをします。

心理師として役に立てることがあるかどうか、スピリチュアルペインがあるかを、総回診のときなどにキャッチします。カルテやカンファレンスで発見することもあります。「アセスメント」というと固いイメージですが、要はお一人お一人について、今どんな状態にあるのか自分なりのモノサシで測ってみます。これはホスピス以外も同じです。これは「おまけ」ですが一人の患者のアセスメントのとき、その周りにも人もアセスメントします。たとえばご家族は？とか担当医療者との相性は？とか。つまりは主治医がちゃんと患者さんの話を聴いてくれてないなあ、というときは主治医でもつつくし、看護師さんにも苦言を呈することがある。なにせ「スキマ産業」ですからね。

#### —職員のメンタルケアもしていますね—

看護師さんや医療者の向こうには患者さんがいるのでね、患者さんに迷惑が掛かってはいけないから、医療者側のメンタルヘルスも重要です。

#### —新病院に対する抱負をお願いします—

新病院だからといって目新しいことは特にないです。これまでやってきたことを一所懸命にやるだけです。私はあと何年続けられるかわからないけど、どんどん使ってください。なんぼでも働きます。あとは私の後任を育てるのも使命かと。このホスピス魂を伝えられて私が去ることができたらと思っています。ホスピスの患者さんに教えてもらって今があるのですから。

急性期病院では効率重視でとにかく早く診断して早く退院してもらってという方向と、ここの病院のように個を大事にしていくことの 2 極化が進んでいるような気がします。でも患者さんからは、ハートの詰まった対応が求められているように思います。そこに困っている人がいたらちょっと声をかけられる、そういうことが大事ですね。